

## (一見「不作法」な)謝辞のススメ

「お妾さん気質」や「無感動性当たり前症候群」を脱却するための謝辞の活用法

黒田 航

(独) 情報通信研究機構 けいはんな研究センター

Modified on 2010/04/24

### 1 はじめに

#### 1.1 謝辞に関する日本的な「慣例」

以前から非常に不思議に思っていたことなのだが、日本の(言語)学会では謝辞の表明が盛んではない。

まず、謝辞が述べられる機会が絶対的に少ない。学会での口頭発表のための配布資料の中であれ、発表に用いられるスライドの中であれ、謝辞が述べられないほうがデフォルトで、述べられるのは特殊な場合に限られる。

また、謝辞が述べられていることがあっても、その用途は限られている。典型的には学会での口頭発表の際にフロアの偉い先生からコメントを頂いたことに対する感謝とか、投稿論文の査読過程で匿名の査読者から頂いたコメントに対する感謝とか、そういうものばかりだ。同僚からよい示唆を受けたとか、後輩にオモシロイ事実を指摘されたとか、そういう事実に対する感謝を述べる場合は、本当に数少ない。

#### 1.2 「お妾さん気質」：日本人が謝辞に関して(必要以上に)控え目な理由 1

##### 1.2.1 日本人にとっては何が「ありがたい」のか？

謝辞はありがたいものに対して、それを与えてくれた人に感謝の意を表明することである。日本人研究者の謝辞が少ないとすれば、それは彼らがあがたいと思う機会が少ないということではないだろうか？

実際、そうなのである。より正確に言うと、多くの日本人研究者が「ありがたい」と思うものは、欧米の(特に米国の研究者)が「ありがたい」と思うものとは別のものなのである。

多くの日本人研究者にとって、誰かの意見、助言、指摘が「ありがたい」のは、その誰かが「周囲から一目置かれている人物」で、「そんな偉い人が自分に目をかけてくれた」からである。従って、意見、助言、指摘の内容が自分の研究の進展にとって「有益な情報」を含んでいるからではない。

日本の(言語)学会の「慣例」では、謝辞は手放しに献じるものではなく、言ってみれば「とっておき」の場合にしか献じないものなのである。もっとあり体に言えば、謝辞は「特別なお方からお引立て」に対する感謝のために温存しておくものであるという暗黙の了解がある。

私は断言する: これは「(お偉方に)目をかけられる」とか「(芸者が旦那の)ご鼻眞に預かる」感覚と同じ。「お妾(=目かけ)さん気質」であり、日本の(言語)学会の最悪の部分である。それが最悪の部分なのは、「お妾さん気質」こそが日本の(言語)学会のおぞましいほどの権威主義の温床となっているからである。

私は更に断言する: 謝辞を「とっておき」の感謝のために温存するような慣例は、理性ある人間ならば、直ちに放棄すべきである。それは日本の研究体質の最悪の部分である権威主義を助長し、学問の進歩を疎外する。

謝辞の表明にはすばらしい効能があり、そんな下

らない用途に使用を限定するのはあまりにもったいない。以下、その効能を具体的に述べ、脱「お婆さん気質」のために、謝辞をもっともっと積極的に活用しようという議論を展開する。

### 1.2.2 お断り

日本人研究者が欧米の研究者に較べて謝辞を述べる機会が少ないことの説明として、私はそれに「お婆さん気質」に起源があるという仮説を立てた。その仮説は十分な調査に基づいて形成されたものではないが、以下では、それが外れてはいないという想定の下で議論を進める。

もちろん、これは経験的な仮説であり、誤りである可能性がないとは言えない。その妥当性に対して、私は特別にバイアスをもたない。これが誤りであることを明らかにするデータを私に突きつけ、「そんなことはない」という反論を受けるのは大歓迎である。だが、客観的な事実の観察に基づかない(権威主義的な)反論の場合には、どんな偉い人が文句を言うてこようが、私は無視する。議論に値しないからである。

## 1.3 「無感動性当たり前症候群」：日本人が謝辞に関して(必要以上に)控え目な理由 2

お婆さん気質に較べるとまだ程度が良いが、それでも良くないもう一つ理由がある。日本の学生が先生や先輩から指導、意見、助言をもらえるのが当然だと錯覚する傾向、別名「無感動性当たり前症候群」である。

これが良くない理由を説明するのは「お婆さん気質」の場合に較べるとずっと難しいが、この「当たり前症候群」も現代日本人特有の「無感動」に由来する、国民的、民族的傾向であるのは明らかである。私の限られたアメリカ滞在の経験からすると、少なくとも平均的なアメリカ人は平均的な日本人より、遙かに多くの感動と感謝と共に毎日を生きている<sup>1)</sup>。ア

<sup>1)</sup>黒人、特にスラム街の人々に関してこれが妥当するかは、怪しい気がするが。

メリカほどではないにしても、おそらくヨーロッパ人もそうなのではないかと思うし、日本以外の東アジアの多くの国でもそうではないかと思う。

現代日本人の幸福は麻痺してしまっている。

### 1.3.1

高度成長期以来、日本人の子供は、毎日、当たり前のように美味しい食事をし、毎日、当たり前のように楽しいテレビ番組を見、時期が来れば、当たり前のように中学に進学し、当たり前のように高校に進学し、当たり前のように大学に進学し、それなりの確率で大学院に進学する。欲しいと思った本はたいてい手に入り、欲しいと思ったCDはたいてい手に入る。これが結果するのは、必要なものは何でもすでに世の中に存在し、必要になったら(ちょっと苦労すれば)すぐに手に入るという感覚、別名「無感動性当たり前症候群」である。

当然、彼らは同じことを研究に関しても期待している。指導教官が学生を指導するのが当たり前で、ゼミの先輩が後輩に助言することが当たり前のことであるかのように錯覚している。荒木飛呂彦流に言えば「コーラを飲んだらゲップが出るのと同じくらい当然だ」と思っている。

確かに指導教官が学生を指導するのが義務で、ゼミの先輩が後輩に助言する役割の一部だという認識は正しい。だが、教育「制度」がそうなっているとしても、それはあなたが必要とする情報を最良の形で入手できることを、まったく保証しない。多くの学生には、この制度の提供する可能性と自分の人生での現実化との間のズレに関して、自覚が不足しているように思われる。

実際、知られていないものを発見する。存在していないものを作り出すのが研究の重要な部分なのであるから、先生や先輩が指導の際に後輩に与える情報のすべてが、その辺のスーパーマーケットに並んでいるお総菜と同じように「当たり前」だというわけではない。実際、ヨイ指導教官につくつかつかないか、所属する研究室でヨイ先輩に恵まれるか否かで、学生の研究の質が大きく結果が左右されるのは、一

人の学生にとって自分の置かれている環境で入手可能な情報のすべてが「当たり前」でないことの証左である。

### 1.3.2 「恵み」の概念

些か説教臭くなるが、これは典型的な日本人は、何かを必死の思いで探し求め、やっとの思いで見つけたり、作りだしたりすることで得られる感動が絶対的に不足しているように思う。たいていのものはすでにあり、お金を出して購入するだけである。

この状況は不幸である。それは人々から手に入らないものが手に入る幸せを奪い、彼らの生活を無感動にする。幸福感は怠け者の人間を目標に向かって努力させるための巧妙な装置であるが、現代日本人の多くは、幸福を感じる器官が退化してしまっている。

恵みを意識しよう。恵みを意識すれば、謝辞は献じる気持ちは自然に生じる。

ワイン作りや、米作りのことを考えてみよう。良いワイン、良いお米ができることは、まったく当たり前のことではない。おいしいワイン、おいしいお米を作るための技術は豊富にある。だが、本当においしいワイン、おいしいお米を作る人たちは、極々一握りの人たちである。なぜか？

作物を作るということは、本質的に「当たり前でない」からである。良い作物ができるかどうかは気候条件や地理条件という形で本質的に運に左右される。農業に従事する人は、都会人に較べてずっと、今でも恵みに感謝し、それをありがたいと思う気持ちをもっている。

それと同じこと、つまり本質的に運に左右されるという事実が自分の研究についても成立しているとしたら、なぜ思わないのだろうか？ そのことに気づけば、自分が常に指導教官から有益な情報、先輩から参考になる意見をもらえることが、いかに当たり前でなく、恵まれているかに気づき、それに感謝しないではいられないはずだ<sup>2)</sup>。

<sup>2)</sup>偶然の役割に関する非常に鋭く、かつ有益な論考は [2] である。関心のある方には一読を勧める。

## 2 謝辞の効能

以上の「お妾さん気質」と「無感動性当たり前症候群」の考察の下、以下では謝辞の効能について述べる。

### 2.1 二つのシナリオ

謝辞の効能を理解するのは、簡単である。助言する側の立場に立ってものを考えてみればよい。

助言がある効果に繋がる場合、基本的には、たった二つのシナリオしかない。

- シナリオ A:  
あなたが誰か Y に研究上の助言する。Y はそれを貢献と認め、それに対し公共の機会 — 学会発表や公表論文 — の謝辞で感謝の意を表明する。あなたはそれを知り、嬉しく思う。「また機会があれば、同じように助言してあげよう」とあなたは思う。
- シナリオ B:  
あなたが誰か Y に研究上の助言する。Y はそれを貢献と認めず、それに対し何か感謝の意を表明しない。あなたはそれを悲しくは思わないにしても、嬉しくは思わない。感謝されないのだから、「今度同じような機会があっても、わざわざ Y に助言してあげる必要はないな」とあなたは思う。

二つのシナリオの行き着く先の違いは決定的である。シナリオ A では、Y は援助への感謝の意を積極的に表明することによって、ますます多くの助言がもらえるようになる可能性があり、ほとんどの場合、実際にそうなる。これとは逆に、シナリオ B では、Y は援助への感謝の意を積極的に表明しないことによって、ますます助言がもらえなくなる可能性があり、ほとんどの場合、実際にそうなる。

更に、シナリオ A の妥当範囲は、当事者同士の関係に限られない。あなたが積極的に感謝を表明する人だと判れば、より多くの人があなたに援助を与え

てくれるようになる可能性がある。自分の貢献が公共の場で明示化されるのを好まない人は少ない。

なぜそうなるのか？ 理由は簡単なのである。

## 2.2 「富めるものはますます富み、貧するものはますます貧す」の原理

人間関係は複雑系である。複雑系の常として、それはフィードバックの連鎖からなる。

理論的にはシナリオ A では、正のフィードバックのサイクルに入り、シナリオ B では、負のフィードバックのサイクルに入る。この結果、正負の違いにより、「富めるものはますます富み、貧するものはますます貧す」るワケである。

一回や二回では、シナリオ A, B の差は些細なものであるように見えるかも知れない。だが、長期的に見れば、その差は歴然としている。正負いずれにフィードバック循環でも、効果は複利式であり、長期的には劇的な結果に結びつく。

## 2.3 知力と労力の分散

私が見る限り、欧米の研究者は「物知りからの智慧を借り、それに謝辞で報いる」という情報交換から発生する正のフィードバックの効果を自分の研究にうまく活用しているように思う。物知りからの援助を期待して良い条件では、問題を解決するのは特定の個人だが、その背景で利用される知的資源は複数の研究者のネットワーク、あるいは「人脈」のものである<sup>3)</sup>。それは問題解決のための労力と知性を分散させる合理的な問題解決の手法である。

これに較べると、日本的な問題解決のシナリオではずっと個人への負担が大きく、有能な個人（「侍」的な人物）が英雄的な努力で解決するという決着が好まれる。穿った見方をすれば、日本の問題解決は (i) 「なあなあ」で何も決着らしい決着を着けないか、(ii) 一人の人間が好き勝手に決着を着けるか、のどちらかに二極化する。その中間の理性的な集団

の合意というものがない（実際、日本人は、ありとあらゆる側面で「合理的な合意」の形成が信じられないくらい下手くそである。典型的なお役人と住民との「話し合い」がいかにか上から下への一方的な押しつけであるかを見れば、このことはすぐ判る）。この点に関して言うと、欧米は日本に較べ個人主義だと言われながら、実際には欧米の方が共同作業の良い点を見えない形で活用しているとも言える。日本に一流の研究が少ない原因は、この辺にもあるように思われる。

## 2.4 「箔」をつけるくらいなら実をつけるか、人脈を作ろう

あなたが研究している問題の解決に対して、誰か X が有益な情報 I を与えてくれた。すでに考察が済んでいるように、日本的な慣例では、あなたから見た I の純粋な有益さ以上に、X がどんな人物か、もっと明確には X がどれぐらいの地位をもつ人物かが重要になる。人物 X が「業界の著名人」である場合にのみ、あなたは I をありがたく X 賜ったことに対し謝辞を述べ、それ以外の場合には謝辞を述べるのは「不粹」で「不躱」な行いである。

このような「粹」な行動を、私は「お妾さん気質」の結果だと言った。では、「お妾さん気質」の背後には何があるのか？

それは、X が誰も知らない人物なら、X に謝辞を述べることは自分の研究に箔をつけることにならないから、つまり、自分の「得にならない」からである。このような損得勘定が「お妾さん気質」の本質である。

だが、明らかに「自分の研究の箔」とかいうケチ臭いものにこだわっているのが、そもそも日本の多くの研究者が救いようがない理由なのである。あれこれ「箔」をつけるために努力するくらいなら、物知りからどんどん情報を入手して、「実力」をつけた方が絶対にいい。それによって交流の輪を広げ、人脈を作った方がいい。

科学の進歩に貢献する業績が尊いのは、それが科

<sup>3)</sup>有益な情報源としては [1] がお勧めできる。

学者共同体全体への奉仕だからであるはずだ。研究上の荣誉は「偉い方々から頂戴する名誉」ではない。

知識を進展させるのは、科学者の義務である。「お妾さん気質」に染まっている連中は、個人の荣誉に目が眩んで、科学者の義務を放棄している。この辺に関しては、欧米の研究と日本の研究とで、科学者の義務の意識の違いになって現われる「伝統の違い」を見る思いをする。

## 2.5 まとめ

以上の簡単な原理が解れば、「なぜ日本の研究者は謝辞を効果的に使わないのか?」という疑問が残らない。この疑問の答えはすでに示した通りである。日本人が謝辞を効果的に使えないのは、彼らの「お妾さん気質」故、あるいは「無感動性当たり前症候群」故にである。「お妾さん気質」のような損得勘定で研究活動を行っている彼らは、科学者というには、まだまだ遠いところにいる。彼らほど悲惨ではないにせよ、「無感動性当たり前症候群」の患者も、科学する本当の喜びからは遠いところにいる。

## 3 結論: あるいは「不作法な謝辞のススメ」

### 3.1 科学者にとっての謝辞の存在意義

以上の考察から次のことは明らかである。

あなたに研究している問題の解決に対して、誰か  $X$  が有益な情報を与えてくれたのであれば、 $X$  がどんな地位にあるかには関係なく、それに謝辞を献じたほうが、あなたにとって、あなたの属している研究共同体にとって有益である。あなたが科学者であるならば、重要なのは「どんな情報をもたらしたか」が問題なのであって、「誰がそれをくれたか」ではないのである。従って、謝辞を「目上からのお引き立て」の機会に取っておく理由は、まったくない。それは問題解決の作業効率を下げる効果しかない。

### 3.2 「不作法」な謝辞のススメ

というわけで、私は「不作法な謝辞のススメ」をする。

バカバカしい日本的な慣習に倣うのは止めて、なりふり構わず、もっと「不作法」に「不躰」な謝辞をつけよう。知人からの重要な事実を指摘されたら、それに謝辞を献じよう。後輩からの自分の理論の根本的な誤りを指摘されたら、それに謝辞を献じよう。先輩から助言をもらったら、それに謝辞を献じよう。そして、「そういう風に謝辞を献じるのが当たり前だ」という感覚を身につけよう。その感覚を身につけて初めて、あなたは「真の科学的研究者集団」の一員入りである。

謝辞を献じる機会をもっと広げよう。謝辞は公表論文につけるだけでなく、学会での口頭発表の際にも、あるいは小さな研究会の研究発表の際にも、大学でのセミナーの研究発表の際でも、どんどん謝辞を献じよう。

このような努力を続ければ、あなたはますます多くの人から助言を得ることになり、それにより、あなたはますます多くの研究成果を出し、ますます多くの貢献ができるようになる。

このような行いはすべて自分自身の利益のためであるばかりでなく、自分の属する研究共同体の利益のためでもある。

## 参考文献

- [1] M. グラッドウェル. 急に売れ始めるにはワケがある. 飛鳥新書, 2000. [Gladwell, Malcom (2000). *The Tipping Point: How Little Things Can Make a Big Difference*, Little Brown, 2000 の翻訳].
- [2] L. ムロディナウ. たまたま: 日常に潜む「偶然」を科学する. ダイヤモンド社, 2009. [原典: Leonard Mlodinaw: *The Drunkard's Walk: How Randomness Rules our Lives*, Vintage, 2008.].